

連載を振り返って

東京には、江戸時代に命名された坂が五〇〇余りも残っている。江戸の市街地では、大名や旗本などの武家屋敷が立ち並ぶ地域には、町名がつけられていなかった。しかも、屋敷の表門に標札が掲げられているわけでもなかった。これは、武家屋敷に野菜や魚などの商品を届ける町人にとっては、不便の上ないことだった。そこで、町名の代わりとして坂に名前をつけることが発想された。坂名が町のランドマークとしての役割を担うことになったのだ。

本誌「江戸の坂道散策」では、綱坂・我善坊谷坂・狸穴坂・三分坂・伊皿子坂（港区）や、胸突坂・善光寺坂・無縁坂・湯立坂・鐙坂・御殿坂（文京区）、目切坂・行人坂・権之助坂・別所坂（目黒区）、七曲坂・浄瑠璃坂・庚嶺坂（新宿区）、三浦坂（台東区）、寮の坂（世田谷区）、蟬坂（北区）を取り上げた。私は名坂の条件を①勾配が急であること、②湾曲していること、③江戸情緒があること、④坂名の由来がユニークであること、としているが、いずれの坂もこの条件を満たし、名坂中の名坂であるといつてよいだろう。

坂の魅力は実際に歩いてみることに尽きるが、それを倍加させることとして、江戸の『切絵図』を持って歩かれることを推奨したい。入手しやすいのは、江戸後期に発行された『金鱗堂・尾張屋清七板』だ。図



綱坂(港区)



目切坂(目黒区)



七曲坂(新宿区)



三浦坂(台東区)

面は五色に色分けされ、武家地は白、寺地は赤、町屋は薄墨、道路は黄、田畑は緑と、街並みが一目でわかるように表現されている。坂には≡印があつて、坂名が記されているところもある。坂の位置を特定するには、多少の専門知識があるので、現代地図と対照した書籍も刊行されているので、これを参考にされるのもよい。

むろん、江戸の街並みがそっくり残されているわけではないのだが、ふと、江戸時代に迷い込んだような錯覚に襲われることがある。こうした雰囲気の中で坂を眺めてみると、歴史を深く刻み込んだ坂のよさが、ひしひしと伝わってくるのだ。そして、これらの坂がいつまでも残されることを願って止まない。

目切坂▼ 第40号で紹介。東急東横線・代官山駅で下車し、八幡通りを左折。旧山手通りを横断して代官山交番に向かう。

三浦坂▼ 第45号で紹介。千代田線・根津駅1番出口を左折し、不忍通りを進む。「根津小入口」の信号を右折していくと坂下へ。

綱坂▼ 第39号で紹介。JR田町駅か都営三田線・浅草線三田駅で下車し慶応大学に向かう。正門前の信号のすぐ先を右折する。慶応中等部の先が綱坂の上り。

七曲坂▼ 第41号で紹介。西武新宿線・下落合駅から新目白通りを横断し、右折して高田馬場方面へ進む。薬王院入口を左に入り、次を右折、1本目を左折する。

●坂道研究家 山野 勝

一九四三年、広島県生まれ。早稲田大学政経学部新聞学科卒業。報知新聞社を経て講談社に入社。「ヤングマガジン」編集長、第三編集局長、取締役、常務取締役を務めた。この十数年、東京の坂道を積極的に歩き、エッセイや講演などで坂道ブームの火付け役に。著書に「江戸の坂―東京・歴史散歩ガイド―朝日新聞出版」、「江戸と東京の坂―古地図で歩く江戸と東京の坂―(以上、日本文学社)」がある。

江戸の坂道散策

別所坂(目黒区)

別所坂アクセス▼東急東横線・代官山駅下車。銚ヶ崎の信号から駒沢通りを下り、2本目を左折し、突きあたりを左折して進む。

目 黒区の中目黒一丁目と二丁目の境を南西から北東に上る長い坂がある。

瀟洒な住宅街を大きくS字状に湾曲し、坂上近くで直線の急坂となる。この坂を別所坂という。この道筋は江戸時代からあり、目黒方面から別所坂を上り、麻布を経て江戸市中へ通じる最短距離の道だった。「別所」とはこの辺りの旧地名で、①新しく開かれた土地(開墾地の集落)とか、②行き止まりの場所を意味するといわれる。実際に歩くと、坂上は崖にはばまれ、車の通行は不能で、歩行者のためには石段が設けられている。

別所坂の坂上は別所台と呼ばれ、遠く富士の名峰が望める景勝の地だった。江戸時代の後期、この台上に幕府先手組与力・近藤重蔵の別邸があった。重蔵は北蝦夷・千島列島の探検家として知られる。文政二年(二八一九)、重蔵はこの邸内に富士塚を築いた。目黒新富士と呼ばれ、江戸の名所の一つになっていた。歌川広重の『名所江戸百景』にも美しく描かれている。

しかし、書物奉行に栄進していた重蔵は、老中・水野忠成と対立し、大阪御弓奉行に降格・左遷され、さらに、差控えの刑を受けて滝野川(北区)に蟄居処分となった。その間、富士塚の管理は隣家の塚越(塚本

ともいう)家に託していたが、参詣客にか

らむ利害問題が生じていた。文政九年(一八二六)十月六日、塚越家の理不尽さに耐えかねた重蔵の長子・富蔵が塚越一家五人を殺害するという事件が起こった。重蔵は近江大溝藩にお預けとなり、富蔵は八丈島に流された。富士塚は今はなく、「テラス恵比寿の丘」という住宅になっている。

また、江戸時代には坂上を横断して、三田用水が通されていた。この水は、明治二〇年(一八八七)創業の日本麦酒醸造会社(サッポロビールの前身)の工場用水としても利用され続けていたのだ。

コラム坂

一服茶屋

本文中に登場した近藤重蔵は、八丈島へ流罪となっても武士の誇りを失わず、在島六十年の間に、不朽の名著『八丈実記』を書き上げた。八丈島の歴史や民俗を精査・記録し、六九巻にまとめた。近藤家は文武に長けた家系で、祖父・守知は千家茶道に通じ、父・重蔵は和漢古書の書誌学研究を行った。重蔵は明治一三年(一八八〇)に赦免され東京に帰り、同二〇年に八二歳で没したという。

